

人が作品に出会ってまずそれから得る情報と言ったら、普通タイトルであろう。そんな大事なタイトルを作家たちはどのように決めるのか気になっていたのも、この機会になぜ森鷗外が「舞姫」というタイトルをこの作品につけたのか考えてみた。

作品中で主人公の豊太郎がエリスのことを「舞姫」と呼んでいることから、この物語の超重要人物であるエリスのことをタイトルにつけたのではないかということが簡単に考えつく。

しかし、僕の考えた結論から言うと、もちろん「エリス＝舞姫」でもあるが、主要登場人物すべてが何かしらに踊らされているからタイトルが「舞姫」なのではないかということである。

この作品の主要な登場人物は豊太郎、エリス、相沢である。

まずエリスから考えてみると、エリスは職業が舞姫である。しかし、それだけではない。エリスは偶然公園で出会った豊太郎に心を惹かれ、そして捨てられ、そのショックから精神を狂わされる。つまり、豊太郎に踊るに踊らされたのだ。

次に、豊太郎。まず豊太郎は、日本を出るまで母の期待、官庁の期待によって「まことの我」を抑えられていた。ドイツでもエリスに心を奪われ、そのせいで職も失い、そして相沢にその仲を壊され、エリスを狂わされ、帰国してからもその後悔と相沢に対する恨みを持って生きていけなくなっていた。つまり、母親に、官庁に、エリスに、相沢に人生をめちゃくちゃにされた、踊るに踊らされたのだ。

そして、相沢。一見、彼は人間的に出来ていて、順風満帆の人生であり、何に踊らされているわけではないように思える。

しかし、この手記を書いた豊太郎の視点から考えてみる。

まず相沢が豊太郎と昼食を共にしたとき、相沢は豊太郎に「自分の社会的な立場のためにもエリスと別れろ」と勧める。しかし豊太郎はそれを受けて、「そんなことを言われても捨てがたきは愛」と思う。(以上 P286～P287 より)

次に豊太郎が伯と共にロシアに行ったとき、豊太郎は「わが舌人たる～落としたり」(P289L7 より)と述べている。これは宮廷社会などに携わることはよいことではないと考えているともとれる。

このふたつより、豊太郎は愛を捨て、社会的身分の高い場で働くことをあまり良しとしていないとわかる。

そして、豊太郎が伯に帰国を勧められているとき、豊太郎は「本国に帰り～告げざりしか」(P292L7 より)と述べている。このことから豊太郎は相沢のことを仕事だけの人間と見ているとわかる。

これらより豊太郎から見ると、相沢は社会的立場に踊らされているとわかる。

以上よりこの物語の主要登場人物はみななにかに踊らされているといえる。そして主

人公が心を奪われる女性の仕事が舞姫なので、森鷗外はこの話のタイトルを「舞姫」にしたのではないかと僕は考える。